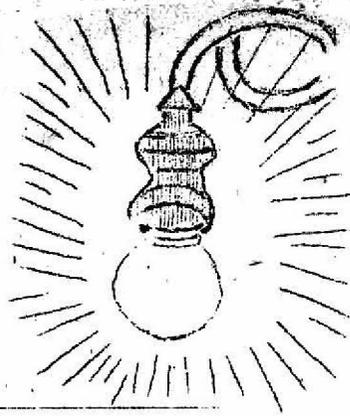




# 胸部外科の進歩



副院長 織木正慶

胸部外科は、日に日に進んでいく。毎年一回秋の胸部外科学会に出席すると、いつも私は一種の興奮にとらはれて武者ぶるいを禁じ得ない。二年前に驚異の眼をもつて迎えられた肺切除は現在はどうか、私の如き若輩が八月からたつた四ヶ月の間に三例を為し終えて経過はすべて良好であり、来年早々三人の肺切除患者が入院を待機している。

肺切除術が始められた時には、半数以上の人が六ヶ月後には死した。手術時向は十時向を越えていた。

出血量四〇〇〇C、手術時間二時間五十分である。さうかに肺切除術は外科的胃腸の域を脱して安全に、空洞根治術として登場した。記である。また肺切除は危険な手術と考へられていた所もあるし、四五年前所も行はれていく所は、多くはない。然し、今この結核病院に於ては、いまだ危険なものではない。結核との戦いにこの手術が強力な武器となつた。いわば、これが「手術の社会化」である。さうして私は来年一九五二年は、肺切除と、これを一步すすめた。肺切除の年として大いに張切っている訳である。

《 医に償に國家補助がない限り、これだけの計画も、絵にかいた餅になりません。あくまでも社会保障制度確立の為に、手を動かして貰ひませう。》

## 検査をひとつとしとし、お出し下さい

織木病院では、いま塗抹と培養の検査をやつていきます。培養はこんど新しいフロン器を買いました。培養地も、川島式培養地を川島培地に改め、検査員も専属の検査員を指員しました。四五十分の培養能力があります。皆さんの中に一度又は二度確實に痰をもつていらつしやる方が何人いるでせうか、皆さんは自分の病気が治つてゆくかどうか、に深い関心をもつていらつしやると思ひます。良くなつてゆくかどうかを判断する材料として検査の結果がとんたんに入るパイセンテーシをわけていくかは、いまさらいうまでもないことと思ひます。

なお検査部からの御注文は

滅菌試験管は必ずもどすこと。試験管にも前をはつて来ること。必ず受付からもらつた伝票をそえて出すことなす。

### 病 院 月 報



在院患者数 三三名  
 月初 三三名  
 月末 五三名

手術施行数	在院患者数
肺葉切除術 一例	三三名
胸廓成形術 二五例	五三名
胃切除術 三例	
虫様突起切除術 二例	
腸閉塞切除術 一例	
脾臓切除術 一例	
空腸切除術 一例	
外来患者延数 五七〇名	
一般患者 一四〇名	
結核患者 二五名	
入院待機患者	



# 自宅療養者の組織について

去る十一月四日行はれた織

本病院での懇談会で、病院

側から自宅療養者の組織化

という問題が提案され、討

議された。かねてから私も

患者としてその必要性を感

じていたが、病人にあり勝

なズボラと臆怯さから、何

れ誑かす提案するだらうと

あなた任せにしていた。が

こう云ふ組織はなるべく早

く結成された方が患者及び

病院双方に有形無形の利益

をもたらすものであること

が今更ながら痛感された。

私は茲に懇談会で述べられ

た意見を總括し、多少私見

を付け加えて当日出席でき

なかつた多くの友諸君にお

得たい。

X

オ一に、こゝでいう自宅

療養者は、織本病院で、胸

廓成形術や気胸、気腹、その

他、治療を受けた結核患者に

一定限定する。

オ二に、組織の構想とし

ては——自宅療養者にはい

くつかの行き方があるが——

我々の場合、私立織本病

院とその患者とが協力し、

一体となつて何ら矛盾せず

に、しかも双方のプラスに

なるものを創設したいので

ある。

患者は一日も早く病気が

ら解放されたいと念願して

いるし、一方病院側は院長

副院長を先頭として、従業

員の皆さんは出来るだけ正

しい医療及び業務を施行し

て、患者や社会の要望に応

えようと努めるのが、本来

の建前であり理想であり、

そして織本病院は、そうあ

ることを念願とし一歩々々

改善の道をきり拓きしてい

る病院である。と我々患者

は理解している。従つて立

場は異なるが、患者と病院の

願いと目的には大体共通し

たものが見られるから、そ

の善悪と努力の一致によつ

て両者の利益になるような

組織をつくることは、充分

可能であると考へらねる。

なお、官公立の療養所の場合

には、立場や条件が違つた

ので組織の構想も自づから

異つてこよう。

一方我々患者はありゆる職

業及び階層から成立つてい

るが、結核という疾患は激

攻撃による被害者であるとい

う處では一致してゐる。それ

故に我々は、いたれり働げま

し合つて、闘い抜いてゆき、

いはゞ戦友なのである。こゝ

困難な斗いを有難に下さる

に、我々が身体を委せた織本

病院といふ城塞を中心にな

が結果することば、最も手

な道であり、また合理的な方

法であると思ふ。

オ三に、以上の構想によ

組織が、差当り自づから結

成するに、事業は色々考へらねる。こゝ

三をあげて、(一) 患者の

会等を利用し、(二) 患者の

上の知識経験や意見の交換、

四) 患者の生活の向上、

生を講師として、五) 年に一度

の研究會、座談會等の開催、

必要になつてくる。

また、この病院では、

や人工氣胸の施行が多いから  
將來アフターケア(後保護)  
施設をどうしてつくるかと  
いう大きな仕事も当然生じ  
てくる。更に組織全体の活  
動仕事の反映であり組織の  
ベルト(紐帶)の役割をなす機  
関誌の発行の必要はいうま  
でもない

第四に以上の仕事を執行  
し運営してゆくために幹事  
なり委員なりを数名選ぶ。  
この役員は患者、病院双方  
から選出されることが望ま  
しい。

第五に、右の組織(念)を運  
営してゆくための経費は、  
会員の会費及び寄附金で賄  
ふことが原則であるが、將  
來、会に事業部を設けて、  
その収益により財政の基礎  
を強化することも予想され  
てよい。

以上で自宅療養者の組織  
についての要領をあらまし  
お伝えしたが、当日懇談会  
で、病院側と患者側より、  
数名づつ、設立準備委員が選  
出されたから設立の日も近  
いことであらう。

× ×

百沢光治良氏が最近スイス  
のサナトリウムを二十数年  
振りさかされたが、帰国後の  
作品。再びアルジヨアの日  
に(文芸春秋十一月号)中  
に登場してくるかつての彼  
の主治医——セオになる  
老博士——の印象的な言葉  
を次に引用して擬筆したい  
——君はも前という言葉で  
博士はいったが、結核になつ  
て不幸だと思つてゐるのだ  
らう。しかし、人間はみな  
何かにつかまえられて、そ  
こでもがいて努力するのが

人生だよ。結核にかまつたのは、君だけではない。私もそうだ。私が采たのは若くて、二年の約束だったのに、一生涯つかまつた動きがとれなかつたやうなものだね。この山に、一生をここに埋めてしまつたもの……

(新宿区 久納 武文)

### 作業療法の一歩

織本病院で二回にわたる手術をうけたのは、ついこの間のことのように思えるが早いもので、もうまゝ一年半になる。裏の畑道を青い顔して一日百メートル、二百メートルと這うように歩きたした私が、今はなんと

皆さんの援助で作業療法  
の真似事をするようになった。

今、皆さんが手にとつて読んでいるこの「新路」第五号こそ、友坂谷君がかり版をきり、私が刷りあげた作業療法一号というわけ。まあ下手なところはそのつもりで少しは我慢して下さい。

出采上つた印刷物は「きたない」の「まづい」と、病院の事務員になんくせつけられ

、今のところ一枚一円の報酬に値切られていますが、今にみておれ」の気がいって、二時間の絶対安静が終えらる、ガバとほねおき、私は、そうとして病院に出勤し、最高三時間の労働をし、へとになつてわが家へたどりつきます。あゝ、作業療法つらきかな、(田島文市)

(この方の前身はお巡さんです。——編集部)

女の人をもつと積極的に!!



十一月四日に開かれました懇談会に女の人の出席は、氣胸の方とも僅か三名しのございませんでした。このやうな会合では全般的に婦人の出席率は悪いものであります。私達は同じ養目的を保持しているのですから、このように一堂に会した場合同じ体験者からでなければ、聞くことのできない各人の異つた体験談や心の機微にふれたお話も聞くことが、できるのではないでせうか。又このやうな会合で得ることの出来る新しい知識は、今後の養育のよりよい指針となること、思います。

女の人殊に未婚者の場合私達のやうなハンデイヤ

ツアを持つことは大きく人生に影響するだけに心の負担も重いこと、思います。それがそれだけにお互ひになぐさめ合ひ、励まし合つて行けたらどんなにか心強いこと、ございませう。私自身も、私からの人生を生き抜く為には、先づ積極的に、と、思い敢えて出席致しました。

このたび織本先生ならびに病院の方々の御熱心の賜として、退院患者のサークルも結成される運びになりましたので、このやうな会合も繁く開かれること、思います。今か交代に生かすものとして、結核を克服する為にも女の方々のより多くの御出席をお願ひ致します。

(井上明江)

いつも患者さんの声を集めるのに一番苦労しています。どうぞ進んでお送り下さい。掲載分には法謝贈呈り。

患者の声

何とかならないものでしようか

——氣胸患者の立場——

土曜日の午後は、毎週氣胸の外患者で、狭い病院の廊下は一杯です。そのほか外傷とか救急車とか物凄いなどつぷりに、至つて氣の弱い氣胸の人達は少なくなつてます。というわけ

で一言ニ言文句を並べればなりませう。第一に待つ時間が長いといふことが、二番の欠点です。火の氣もない廊下になぐまり従業員の方々のバタバタかけるスリッパのほこりを、二—三時間吸はせられると、何の因果でこんな思いをしなげればならないのかと思しくなります。

オニに氣管絞を一緒にやつてるので廊下が大へん暗いのです。手術室には暗幕でもかけて、廊下は明るくして頂きたい、勿論、

ストイブぐらいか二人で、いつでも患者同志でだんらんのもてる雰囲気が出来たら甲分ありませんか。

オニに、従つて三ヶ月に一度ぐらいは先生に出席して、願いて治療指導とか、胸部医学のお話を伺える会合も開きたいと思ひます。

オニに、担当医を小やして毎週二人ぐらいで氣胸して、願ければ能率よくいくのでは、ないでしょうか。出戻りは私費患者、健保家族患者の自己負担額について何とか軽減して下さると、お互い苦しいなかですから大助かりなんです。

この文句を並べても決して私は、この病院の氣胸をけなしているわけではありませぬ。治療技術の上では最高のもの、と信じておりました。たまたま退院患者サークル結成の席上、氣胸患者を代表して文句を云ふといふ、皆さんの御意向に書い

(戸根典子)

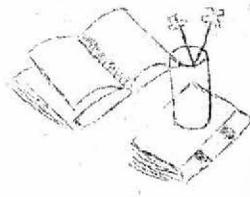
# 書評

芥沢光治良著

## 再びブルジョアの日に

を讀んで

こじまとしひろ



文芸春秋十一月号に芥沢光治良氏が

「再びブルジョアの日に」という紀行を書いている。ローザンヌのペン大会に出席したとき、彼が二十数年前に結核の療養生活を送ったスイスのサナトリウムを訪とされた話である。

結核の療法は自然療法だけか唯一の方法であった時代は彼が「三階の一室で来る日も来る日も仰臥している。管薬をつづけ、口もさかず物も思わず、たゞ息をしてる生物になる修業」をしてきた頃「マガリーの家」とよばれる本屋を経営していた。二人の美しいフランス人と親しかつた。いま二十

年前そのまゝの姿のレーザの駅をおりてみるとやはりそこに「マガリーの家」がある。店に立寄ると肥つて活潑な女主人が驚きの声をあげて迎えた。当時結核で療養していた妹娘のテレーズである。同じ療養者であつたジャンと結婚して今は健康で働いている。しかし彼等は幸運な小教者であつた。当時この結核都市に療養していた人達の大部分は、いまではこの世の人でない。苦しい厳格な療養規律も多くの人を救ひはしなかつた。けれど、今ではすべてがががつていた。当時の主治医であつた下博士は、両腕を大きくひろげ「息子よ生きていたのか」と彼を腕にかゝる。えこゝろながらこう語

つた。「たいした進歩だ。外科手術も新薬も進んだ。いまでは死を率など考へたことはないよ。結核で死ぬなんて考へないから。これほど治りやすい病気はない」というのが私の結論だ。この結核都市にはVという老博士が大学サナトリウムを経営している。そこでは結核におかされた学生が療養しながら勉強し、どの学部も試験をもうけて卒業

### 婦長の巻

上 啓 筆 一  
時々こわい婦長さんの顔を懐い出します。そういふ手紙がくる。退院患者からである。それは、またこわさを懐い出す

なつかしい神戸婦長をおもいおこしたとき、斤にがしかの叱られたことが心に浮ぶといういふ事がある。神戸さんは、いつも患者が早く起きすぎはしないか、病状に悪いことをしてはいないかと親身におもつて病室を

でさる。療養生活が終つたときは大学も卒業できず就職できるといふ仕組である。図書館、実験室講堂があり、通信教授と各大学からの出張教授を基にしている。V博士は全財産と全家族をこの仕事に打ちこんでいるのであつた。それを支えてくれるのは、V博士のじよ、マニテイである。

又まわる。たまに新聞の十日目に、ふりかへる。ていたりする愚者が、こゝとすると、こゝと、何とてんの、とどなられる。こゝと。

直情にして、神おき患者への愛情と仕事、熱情が広い社会的規模、政治的な行動力に支えられて、いるから、織本病室の明るく空気の源泉となつて、いる。誰ですか、おれらが、などというのは、

